

## 平成17年度入学式 学長式辞

愛媛大学長 小松 正幸

愛媛大学に入学された皆さん、本日は誠にありがとうございます。全国各地から、また、海外から合わせて2,056名の皆さんを新入生としてお迎えすることができましたことを、大変うれしく思います。愛媛大学を代表して皆さんの入学を心から歓迎いたします。

このよき日のために、先ほどご紹介させていただきましたように、多数のご来賓の方々のご臨席を賜りました。ご多用にもかかわらずご臨席を賜りましたご来賓の皆様には厚くお礼申し上げます。そしてまた、ご列席をいただきましたご家族はじめ、ご関係の方々のお慶びもひとしおのことと拝察いたします。皆様のご列席に感謝申し上げますと共に、心からお祝いを申し上げます。

ご承知のように、愛媛大学はじめ国立大学は昨年4月より国立大学法人として再出発いたしました。これを期に、私たちは愛媛大学のあるべき姿、これから向かうべき方向を示す指針として、この3月に約1年間の全学的議論を経て愛媛大学憲章を制定いたしました。この憲章で、愛媛大学は「自ら学び、考え、実践する能力と次代を担う誇りをもつ人間性豊かな人材を社会に輩出することを最大の使命」とし、「地域に立脚する大学として、地域に役立つ人材、地域の発展を牽引する人材の養成がこれからの主要な責務」と宣言しました。愛媛大学は法人化を契機に、大学が次の時代を担う若い世代を育てる教育機関であるという原点を再確認し、今まで以上に教育機能を充実させ、学生が自立した個人として人生を生きて行くのに必要な能力を習得すること、社会人となってからも主体的に学ぶことのできる能力、すなわち「学ぶ力」を身につけることを重視すると唱っております。

大学での勉強はその後の人生を大きく左右する大変重要なきっかけ、ある意味では飛躍のチャンスを与えるものです。大学への入学はこれからの人生にとって大事な節目であり、ここから新しい人生が始まると言ってもいいでしょう。では、大学生活を有意義に過ごすにはどうすれば良いのでしょうか。それはただ一つ、学ぶことです。徹底して学ぶことです。もちろん、学問の領域だけでなく、サークルやボランティアなどの自主的活動の中でも学ぶことは沢山あります。

何を学んだらいいのでしょうか。皆さんが学ぶ領域はどこをとっても広大無辺でいくら学んでも尽きることがありません。しかも、4年ないし6年という短い大学生活の中では学ぶことが出来る範囲はごく限られているのです。であるから大事なことは修得する知識や技能の量ではなく、どうやって知識や技能を修得するか、その方法を学ぶことです。

何のために学ぶのかと言えば、第一に、本当のこと、真実を見いだすためです。真実

を見いだすとは、自然の真理や科学的な真理ばかりでなく、社会的な事象、政治経済上の出来事や問題について、本当のことは何かを知ることです。

皆さんはこれまでの小学校から高等学校の学校生活においては、先生から教えられること、教えてもらうことが当たり前のことでありました。このことは間違っているという意味ではなく、基礎的な知識や常識を持つために必要なことです。しかしそれらの知識は、それが本当かどうかを疑ったり追求したりすることを目的に教えられるものではなく、ごく当たり前のこととして理解し覚えてもらうことを目的に教えられたものであります。大学においてもこのような知識を教えるということは大事な教育内容ですが、もっと重要なことはここで強調しているように、本当のことは何かを知る方法を学ぶことなのです。これは大学における教育の根幹だといっているでしょう。

第二には、自己の天分、生きる途を見いだすこと、その途の知識や技能を身につけることです。皆さんが大学で学ぶ目的の一つは大学を卒業後、自分にあつた確かな職業をもつことだということを忘れてはなりません。皆さんは次の時代の社会を担う役割を背負っております。そういう大事な役割をもつ人たちが、将来の目標をもたず、職業意識もはっきり持たないとすれば、大学で学ぶ意識もおのずと希薄になり、そのあげく、いざ就職という時期になって自分は何をしたらいいのかと迷うだけでなく、何も身に付いていないままの自分を発見し戸惑うことになります。

いま、私たちの社会は50年とか100年に一度の産業構造の歴史的転換期であるといわれており、それに伴って社会システムが大きく変わらなければならない状況の中にあります。産業界は新しい独創的技術を作り出すこと、そしてそれを軸にベンチャー起業が創出されることを切望しております。産業界だけでなく、地球環境の問題、高齢化社会の問題、過疎化する山間僻地の問題、食の安全問題など、新しい視点で取り組まなければならない領域が沢山あります。これらは、すべて皆さんが職業として取り組めば成り立つ新しい領域であり、その途の専門家が必要とされているのです。このような時代の転換期には既存の大企業やシステムに安住する途を選ぶのではなく、自分の能力を發揮する場を自らが作り出すような挑戦をしていただきたいと思います。このような時代は若い人にとってはチャンスでもあります。その気になれば、自分が本当に自分らしく生きる途を見つけることができる時代です。

何のために大学で学ぶか、第三には、自分の天分、自分らしく生きる途を見いだすためにも、豊かな人間性を身につけることです。人は人間性を高めることによって、他人や社会、よその国のことや動植物や自然などいろいろなものに興味をもち、関心をよせ、心を注ぐことができます。人間性を高めるには、多くの人との接触の機会をもつこと、自然とのふれあいの機会を多くもつこと、そして、先人の良き書を多く読むこと、をお勧めします。このような活動を通して、社会や政治経済、世界の状況に対して自分の意見を持つこと、自分の意見を表明し発表する能力、コミュニケーションやプレゼンテーションの能力を高めることが可能になると思うのです。

さて、私がここで申し上げたことは、実は、私たちの校歌に簡潔に象徴的な表現で表されているのです。愛媛大学の学歌には、第一小節に「雲とぎすとも、雲分けて、求めむ高き、遠きもの其を」と、そして、第二小節には「いざあらた代の、凶負いて、明るき道を、ただに進まむ」という一節がありますが、まさに、これは私が申し上げたこと、すなわち、今、社会は新しい時代を迎えようとして、まだ先の見えない閉塞感に満ちた状況にあります。次の時代を担う皆さんは、常に理想を追い求め、新しい社会を築くという使命を忘れず、明るく真っすぐに生きよう、と呼びかけているのであります。素晴らしい歌だと思います。入学式、社会に巣立って行く卒業式にもこの学歌をみんなで斉唱するのは、このことを確認するためでもあると思います。

最後になりましたが、皆さんのこれからの4年間、あるいは6年間の大学生活が充実した満足のゆくものになることを心から願ひまして式辞といたします。